

種豚・施設・飼料を使いこなし 設立当初から 好成績を維持する

今回の農場は、離乳から出荷まで一つの豚房で一貫して飼養する「ウィン・トウ・フィニッシュ方式」を採用し稼働から7年目を迎えるが、その成績は落ちることなく好成績を維持している。その秘訣とも言える飼養体系・管理方法について報告する。

ウィン・トウ・フィニッシュ方式の メリットとデメリット

この農場はウィン・トウ・フィニッシュ方式で母豚280頭一貫経営を行う、農業組合法人の8農場中の一つである。離乳肥育舎の1部屋は八つに区切られ、1豚房に18頭、1部屋で14腹分140頭/週を分娩舎からオールアウトして収容する。

この方式により豚の移動回数が減り、①豚への移動ストレスの軽減、②移動という重労働の軽減、③洗浄回数の低減などの効果が表れた。

一方で、この方式には移動が少ないため、出荷時に急激なストレスがかかってしまうことや、増体がよすぎて厚脂になってしまうなどのデメリットもある。その改善として、離乳子豚舎の窓を透明なアクリル板に変え、光が入るようにして適度な刺激を与えるように工夫をしている。また、厚脂対策として、制限給餌法や専用飼料の開発を行っている。

ステージ全体の

オールイン・オールアウトの確立

離乳・肥育豚舎は、合計23部屋

(23×7日＝161日分)の収容能力があるが、常に1週間分を洗浄・消毒・乾燥用に空ける必要があるため、離乳から肥育の収容期間は154日となる。平均離乳日齢21日として最大175日の出荷日齢となるが、農場の出荷日齢の実績は平均155日齢を達成(遅れた豚で175日)。この数字を維持することで、離乳・肥育舎でのAI・AOができる。分娩舎でもAI・AOが確立され、5週分の分娩舎が常に1部屋空く状態が保たれる。つまり、分娩舎から出荷まで農場全体のAI・AO体系が設立当時から確立されている。

飼料から豚舎の巡回まで

基本に沿って育成豚を管理

「子を多く生み育てる母豚づくり

は、育成期から」と組合長は話す。導入から6週間は3頭で群飼を行い、その後種付けまで制限給餌を行う。この期間中に、太りすぎず痩せすぎないベストな体をつくり上げることに注力している。

組合長は毎朝、豚舎を巡回して不調な母豚や子豚がないかを確認する。また、農場に合った温度管理を行うため、マニュアル作成に1年を費やした。従業員にも自分たちで考えて仕事をするようなアドバイスをを行っている。

「種豚・施設・飼料」を自分のやり方に合ったように使いこなすこと、洗浄・消毒などの基本を確実に実施していることに、この好成績を維持している秘訣があるのではないだろうか。

DATA 事業規模

所在地: 東北地方

飼養頭数: 母豚 280 頭一貫
(ハイコープ SPF)

農場の近年の成績



理想的な母豚の体型

Point!

導入から6週間は3頭で飼い、その後は種付けまで制限給餌を行う。そうすることで、太りすぎず、痩せすぎない体をつくっていく

表：農場の近年の成績

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度
正常産子数 / 腹	10.51	11.12	10.71
離乳頭数 / 腹	10.03	10.36	10.14
母豚回転率	2.51	2.37	2.42
肉豚出荷頭数 / 母豚	24.09	23.68	24.11

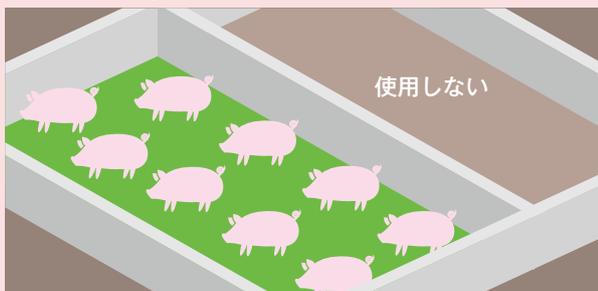


授乳中の様子

ウィン(離乳)・トゥ・フィニッシュ(出荷)方式の採用

離乳した子豚は出荷まで同じ豚房内でストレスなく飼育される

離乳から約20kgまで

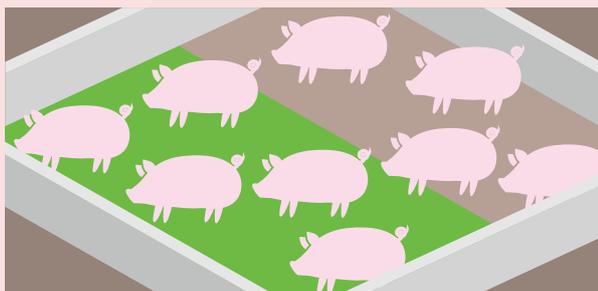


豚房に仕切りを設置し、子豚用のスノコ上で飼育



離乳後の子豚

約20kgから出荷まで



豚房の仕切りを外し、スノコ全面で飼育



肥育期の豚